# ビジョンストーリー【障害のある子の親のためのチャリティーライブ編】

息子が成人し社会人となった今、発達障害のある子の子育てを終えた亜希子は、
自身の子育てを振り返ることが多くなった。
切なさと、至らなさと、後悔と、反省と、決して褒められたものではなく、むしろ自責と罪悪感でしかなかったその子育ては、亜希子の人生そのものと言っても過言ではない。

親子心中未遂をしたあの日のこと、
障害が受容できずに絶望した日のこと、
あなたのような母親が生きていること自体が間違いと他人に叱責された日のこと、
思い出せば思い出すほど、正直一冊本が書けてしまうような壮絶な人生を、
子育てを通して体験してきたなと思うのである。

じゃ、そんな壮絶な人生を私はどうやって生き延びてきたのか？
亜希子はいつもこう思うのである。
大好きなパンクとロックを聴く瞬間があったからこそ、過言でもなく生きてこられたのだと。
パンクとロックのない人生なんて砂糖のない世界と一緒で、生きていくためには必要不可欠なものなのだと亜希子は感じていた。
なぜなら、「パンクとロック」がひと時の癒しとなって、次の生きる瞬間の活力になったからだ。

© Akiko Hashiguchi 2019

朝の支度に時間がかかり叱責して泣き叫ぶ息子を保育園に送り届け出勤する時、
保育園にお迎えに行って先生にしつけがなっていないと怒られた時、
他の子ができることができなくて悩み続けた時、
赤の他人に公衆の面前で怒鳴られて情けなくて叫びたかった時、
母親である自分がなんとかして頑張らないといけないと自分を追い立てた時、
思うようにいかない子育てに悩み続けた時、
母親としての自信なんてこれっぽっちも持てなかった時、などなど。

そんな時、
時として非難からすべてが敵に見えて怒る曲に、
時として私の絶望を代わりに叫んでくれる曲に、
時として切なさのあまり孤独に涙する曲に、
時として未来に勇気をくれる曲に、
亜希子は救われたのである。

© Akiko Hashiguchi 2019

そして、息子がお腹にいる時から聴かせた英才教育？の甲斐あって、息子もパンクとロックを好きになってくれたことが亜希子は嬉しかった。

これまでの息子との関係性の中で、交わることのない言葉と思考が、亜希子の精神的負担になっていたことは事実だし、言葉や思考を通い合わせることは難しいとわかってはいても、どこかで親子だからとあきらめきれない自分がいつもいた。成人して社会人となった息子とやっと会話が成立するようになったこの頃、唯一と言ってもいい、パンクとロックを共通言語として会話ができることは親子であるという安心感を得られることであり、そして最近一緒に行ったライブはやっと親子一緒に心を通い合わせながら外出できたという幸せそのものだった。

亜希子は自身の体験を通して、自分と同じような思いをしている親のために、自分に何かできることはないかと日々考えていた。ふと、自身の大好きなパンクとロックを通して何かできないかと考えたのである。

とかく障害というと、障害のある当事者のためにということが前面に出てきがちだが、

亜希子のように自分はダメな親だと絶望している親のために、

今もなお苦悩の荒波の中で息なんてできないくらい追い詰められている親のために、

自身がパンクとロックに救われたように、親がほんの少しだけでも現実逃避できる瞬間を作りたいと思ったのだ。

社会の中には「親が変われば、子供は変わる」という言葉が崇拝する呪文のように説かれているが、亜希子は違和感を感じていた。確かに、親が変われば子供が変わることはよくわかっている。でも、苦悩の荒波の中にいる親はそれがわかっていてもできない苦しさがあるのだ。

だから、亜希子はいつも思っていた。「親を支えれば、子供は変わる」

© Akiko Hashiguchi 2019

ただの親の自分に、たった一人で何ができるのか？
でも、気がついた人が声を挙げていくことが大切なのではないか、
「親を支えれば、子供は変わる」そう亜希子は自分を信じて、
知人や仕事などで出会うありとあらゆる人たちに思いを伝えていった。
一人、また一人、亜希子の情熱に共感し、協力する人たちが増えていき、そして賛同してくれるアーティストたちが集まって、障害のある子の親のためのチャリティーライブが実現することとなった。

今、亜希子は息子とチャリティーライブの会場にいる。亜希子と同じように子供と一緒に来ている親、今日ばかりは自由の身と一人で来ている親、子供を預けて夫婦二人で来ている親など、そこには、次の生きる瞬間の活力につながる笑顔が会場いっぱいに溢れていた。

発達障害のある子を持ったからといってすぐに立派な親になれる訳ではない。
日々の苦悩の中で親をやめたいと思う時だっていっぱいある。
他の家族が羨ましくてどうしようもなく切なくなる日だってある。
だから、障害のある子の親だって、時には子供と離れて自分を楽しんだっていいじゃないか！
いや、むしろそういう時間が子供との関係性において重要なのだ。

だって、「親を支えれば、子供は変わる」なんだから。

© Akiko Hashiguchi 2019